

先駆 1974年12月20日 第3種郵便認可

2021年3月号

2月25日発行(通巻994号)

毎月1回25日発行

月刊

先 駆

2021 **3** 月
994号

- ◆「3・11」大震災から10年—原発と復興、鉄道、人口減
- ◆新型コロナで変わる、変える—「協助」で貧困解決に挑む
- ◆労働者協同組合法成立—社会的連帯経済への一歩



『平和と社会主義』の思い出

眞砂 卓三

機関誌『構造改革』は1963年12月の第23号で終わり、旬刊のタブロイド政治新聞『平和と社会主義』に引き継がれた。創刊号は64年1月10日付6頁、編集局は大阪市北区高垣町23。一面左肩に立命館大学の学費値上げ反対闘争における全学ストライキの写真とともに、次のような「発刊のことば」が掲載されている。

「1964年がはらむであろう多くの歴史の変動のなかで、このささやかな新聞がどれだけの役割を果たすことができるか、わたしたちは過信するつもりはない。だが、平和と社会主義へ歴史は着実にあゆんでいく。そのなかで日本の革新勢力はなおたくさんのあやまりや、ふるい体質をたださなければならぬ。1964年はそのいくつかをすすめるだろう。わたしたちの新聞もその前進にいくらかは寄与することができよう。そうありたいとわたしたちは決意している」

『平和と社会主義』の創刊から編集部員として関わった真砂卓三さんに「思い出」を寄稿して頂いた。

(編集部)

『先駆』が通巻1000号を迎えるにあたり、その前身であった『平和と社会主義』の発刊に携わった者の一人として、当時の思い出を書いて寄こしてみようか、という話が編集部から届いた。引き受けてはみたものの、しかし、思い

出と言つても、私の手許には、『平和と社会主義』のバックナンバーはおろか、記録やメモの類なども、思い出を呼び覚ますような材料は皆無である。したがって、まったくの記憶だけに頼りに、半世紀以上も昔の文字通り「思い出」を綴ることにな

る。しかし、その記憶というものも、なにしろ80歳の老体である。記憶力は退化の一端を極め、すべての記憶は途切れ途切れの断片である。覚束ないこと甚だしい。

機関誌から機関紙へ

『平和と社会主義』の発刊にあたり、統社同の神戸の責任者である直原弘道が編集長に就き、直原弘道の肝煎で私が編集部に専従することとなった。わずか2年間ほどの学生新聞の編集経験があてにされたのかも知れない。

『平和と社会主義』はタブロイド判4ページ建ての旬刊新聞

狭い一室に置かれた。

(月3回発行)として発刊された。それまで統社同は機関誌として『構造改革』を発行していた。雑誌体裁で月刊の『構造改革』に代えて、新聞体裁の機関紙を発刊するということになり、全国委員会だったかどうか、東京で会合が持たれた。私も直原弘道に従って出席した。席上、新しい機関紙の題字が議題に上り、何人かの人からいくつかの題字が提案された。議論して収まりの着くようなことではなかった。結局、採決で決めようということとなり、比較多数によって、『平和と社会主義』と決定した。『平和と社会主義』の提案者は春日庄次郎だった。

『平和と社会主義』の編集部は統社同本部にくっついて、大阪駅近くのバス通りに面した木造2階建ての2階、5坪ばかりの

この部屋には毎日、統社同全国委員会議長の山田六左衛門(誰もが「山六」または「六さん」と呼んでいた)と書記長の大森誠人が顔を見せていた。事務局には佐々木弘が常勤していた。昼間から来客も多く、毎日結構な賑わいを見せていた。事務所のすぐ近くには左翼専門書店として有名だった曾根崎書店があった。

また、総評大阪の調査部のデスクには大学教授となる前の飯尾要の姿があり、折を見て訪ねては話し込んだりした。飯尾要はその後、桃山学院大学教授を経て、和歌山大学に移り、経済学部長となった。北区でも高垣町と称したこの場所はその後、大阪市の道路拡幅計画の煽りを食って立ち退きとなり、大阪駅からはややより遠くなる、同じ北区の太融寺町に移ることとなるが、私にとつては高垣町に過ごした2年ばかりの日々が深く印象に残っている。

集のことだが、毎号、発行人の大森誠人と編集長の直原弘道を中心に編集会議が開かれ、次号の紙面に掲載する記事のテーマと原稿執筆者が決められた(編集長はその後、当時大阪教職員組合の書記長だった村田恭雄に代わった)。編集部の特従者と言っても、私自身は、個人的に関わっていたベトナム反戦闘争についてちよこつとした記事を書くほかは、立場上も能力的にも、原稿を書くということはなかった。受け取った原稿に見出しをつけて、紙面に割り付け、ゲラ刷りを校正することが私の仕事であった。当時の新聞社で言えば編集部ではなく整理部である。記事の執筆は安東仁兵衛、池山重朗、沖浦和光、代久二(本川誠二)、飯尾要、大森誠人、小寺山康雄、村田恭雄、中岡哲郎らがそれぞれの専門分野ごとに担当した。

編集体制について

さて、『平和と社会主義』の編

『平和と社会主義』の編集部は統社同本部にくっついて、大阪駅近くのバス通りに面した木造2階建ての2階、5坪ばかりの

2階には大阪軍縮協の事務所があった。事務局長の和田長久は統社同の仲間だった。私が当時個人的に関わっていたベトナム反戦闘争では何かと相談に乗ってもらった。

専従者である私には、『平和と社会主義』の発送と配達の仕事があった。大半は統社同の組織を通じて配られたが、全国に散在する個人読者には郵送した。個人読者の中には長洲一二、山田宗睦、力石定一、貴島正道、佐藤昇らの名前もあった。

割り付けと校正

ここまで書いたとき丹羽通晴から、4〜5年前に、大阪市教組の書記だった人が「事務所の掃除をしていたら出てきた」と言って届けてきたという番号分と表示されている。そう言えば、個人読者への購読料の請求事務も発刊当初は私が担当していた。しかし、私では手が回らなくなり、程なく大森誠人夫人の大森英子に、さらに後には長谷川俊英に頼んでいた。

長谷川俊英は当時、桃山学院大学の研究所に職員として勤務していたが、『平和と社会主義』にとつては、桃山学院大学における読者との窓口になっていた。

『平和と社会主義』の経営については、一応独立採算制を敷いていた。職場や地区の組織を通じて納められる購読料は、地方ごとにまとめられ、個人読者から送金された分と合わせて、全国委員会の会計を担当していた佐々木弘が処理し、印刷代その他の支払いを行っていた。独立採算制を敷いていたと言っても、経営は楽なものではなかった。

『平和と社会主義』の印刷方式は当時、まだ活版印刷であった。割り付け用紙と一緒に原稿を入稿し、文選・植字・組版を経て、ゲラ刷りが上がるのを待って、初校、再校と校正して校了となるまで、ほぼ一日、印刷所の校正室に詰める。

印刷所は当時の総評・社会党系の地域新聞「大阪社会タイムス」を発行していた印刷所だった。その印刷所では自治労大阪、大阪教組、大阪府職、大阪市職、私鉄総連関西、松下電器労組など、総評・中立系のほとんどの大手労組の機関紙の印刷を手がけていた。校正室はそれらの編集担当者で賑わっていた。

失敗談と自慢話

先にも述べた通り、記事に出しを立てることと校正は一人の仕事であり、それらのことすべての責任は私一人が負っていた。そんなことで、私の身に振りかかった失敗談と自慢話を紹介する。

まず、校正ミスによる大失敗



談。どんなテーマだったかは覚えていないが、飛鳥井雅道が執筆した記事に、見出しと共に大きく署名を表示した。それが何と「雅」が「稚」と誤植され、校正でも気がつかないまま、印刷されてしまった。その『平和と社会主義』を京都に届けたとき、たまたまその場に飛鳥井雅道がいて、平謝りに謝ったところ、飛鳥井雅道は笑いながら、「構いませんよ。『雅』より『稚』の方が僕には似合っていますよ」と冗談を飛ばして、逆に私を慰めてくれた。飛鳥井雅道の人柄に接することができた一瞬であった。

つぎにこれは自慢話になる。発刊して2年も経った頃だったか、阪本賢三に執筆を頼んで、「物の見方・考え方」というような、いわば哲学入門のエッセイを連載したことがある。十数回ほどにわたって連載しただろうか。当時、阪本賢三の住まいは

阪急電車宝塚線の「雲雀丘花屋敷」駅前であった。原稿を受け取りに毎回ということでもなかったが、何度か自宅を訪問した。そのあるとき、連載も終わった。それに近づいた頃、阪本賢三は「毎回、見出しがとても良い」と褒めてくれた。かねて尊敬していた阪本賢三から褒められたことが嬉しかったからか、このときのことは今でも鮮明に覚えている。

常任として私が『平和と社会主義』の編集部で働いた期間はおよそ4年。2人目の子供が生まれることとなり、生活上の必要に迫られ、山六の紹介で週2日、アルバイトとして出勤していた陸上交通専門の業界新聞社に正社員として就職することになった。後を大阪府職の書記として機関紙の編集を担当していた小寺山康雄に頼んで交代してもらった。(文中敬称略)